黃驥通琴

339
J3

339-53

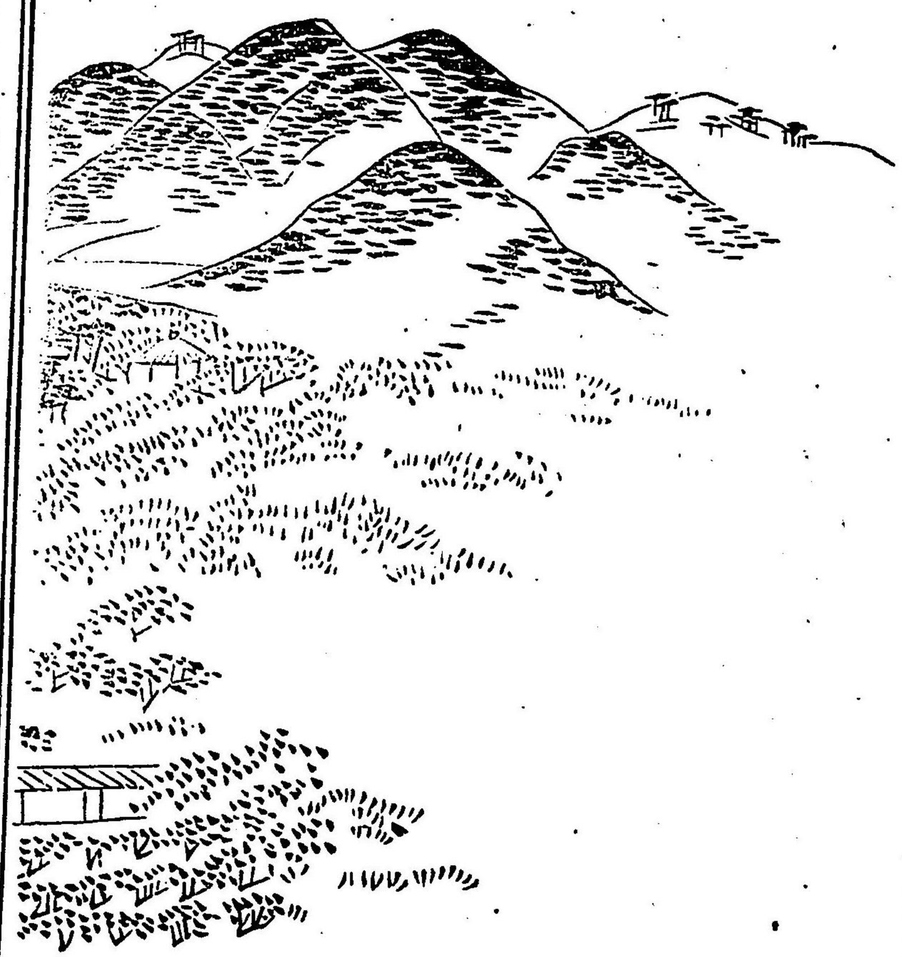
黄檗廼栞

○緒言

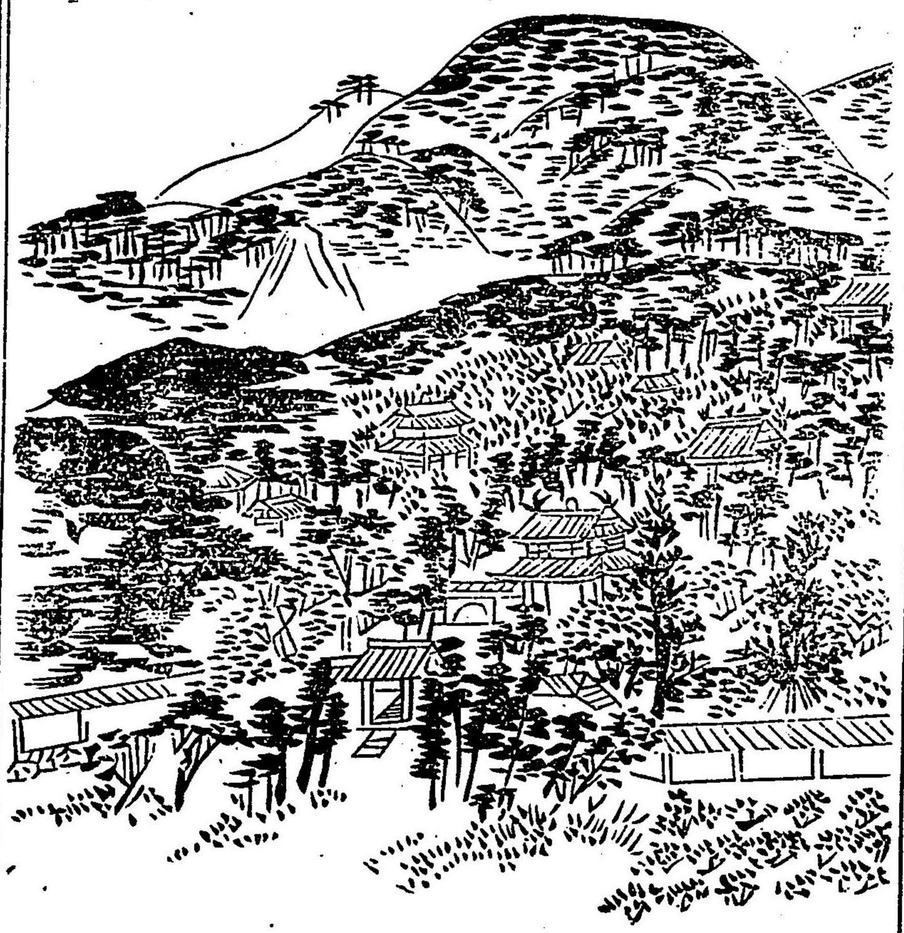
「山門を出れば日本の茶摘歌」とは、古の俳人が黄檗山に詣でけるとき、其伽藍の排置結構の全然支那風なるに感じて咏じ出せるものとぞ云ふなる。實に此の僅々たる十七文字能く當山の光景を云ひ盡くして餘蘊なかりけりとぞ。當山は茶を以て其名を世上に知られたる宇治の五ヶ莊に在りて、黄檗宗の大本山なるが、洛南の壯觀蓋し此名刹を措て他あらざるなり。京都七條の驛より奈良鐵道の滝車に搭じ伏見桃山の二驛を超えて木幡の驛に下り、茶樹鬱々たる間を南に行くこと十二丁にして山門の前に至るを得べし。而して緩かに山門に足を入れば、天王殿、大佛殿を始めとし、東西方丈、禪堂、齋堂、法堂厨房、開山堂、鐘樓、鼓樓に至るまで二十餘棟の堂宇

明治 45. 3. 30 交内

黃　　檗　　山



全　　景



居然として、碧瓦は丹楹と相映じ、柱聯は扁額と芳を聯ねて、其結構莊嚴支那風ならざるなく、境内の趣致全く他宗の諸山に異なりて、坐ろに身は遠く支那の山寺に遊べるかと怪まれぬべし。徐ろに踵を回らして山門を出で去り門前に茶を摘む乙女等が曲調面白しき俚謠を歌ふを聞きて、始めて猶是れ支那の山寺にてはあらざりきと昔しの俳人が訝りしと云ふぞ宜べにこそあれ。いざさらば是れより開山の御略傳を述べ、創立の由緒を欲づべし。

○開山御略傳幷創立由緒

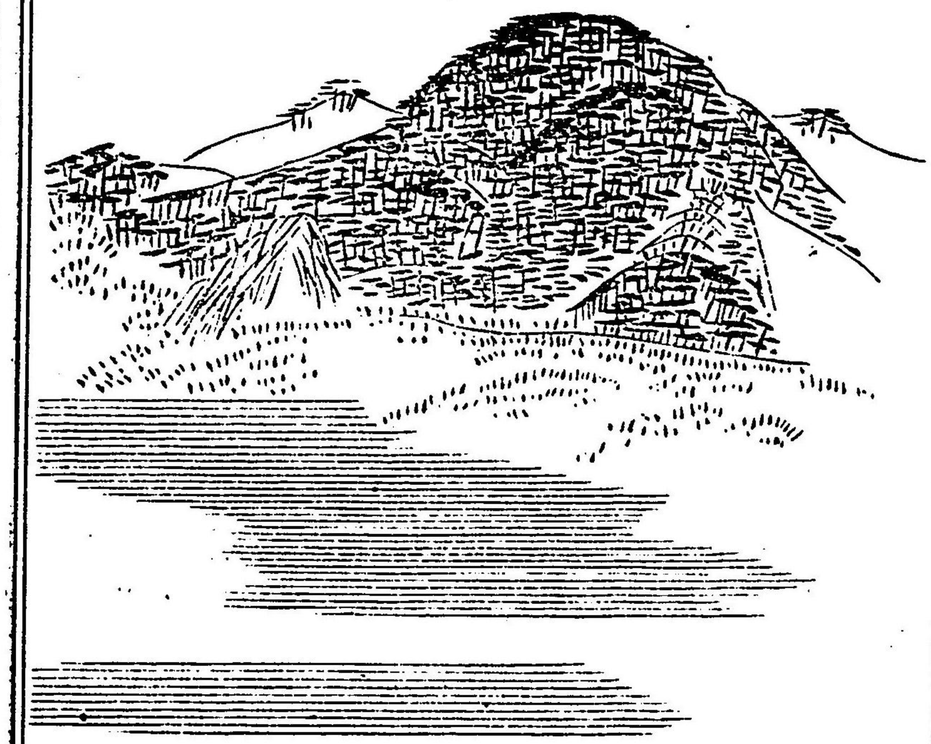
開山は大光普照國師と申し奉る。國師諱は隆琦隱元と號す。明の神宗皇帝萬曆二十年壬辰十一月に福州福清に生れ給ひ、幼にして父の他國に流寓し其家に在はさゞるに因りて母に養はれ、幾多の困苦を嘗め給ひしかど、常に怡然として耕樵の業に從ひ、以て家道を助け給へり。斯くて十六歳の春を迎へ給ひしが、一夜二三の伴侶と與に松下に坐臥し、天文星月を仰ぎ觀て深く感ずる所あり、是より遂に佛を慕ひ法を學ぶの念を起し給ひぬ。斯りしかば國師は僧に逢ふ毎に必ず出世解脱の道を咨決し、日に世味の淡薄なるを覺り給ひ、已にして壯となり給ふに迫び、母は國師の爲めに新婦を迎へんとせられしに國師宣ふやう、男兒世に生れては親恩を重しと爲す、今父他國に流寓して未だ歸り玉はず、其處所をだに知ることなし、是れ人子の妻を迎ふる時ならめや、願くば父に面して後之を娶らんことと未だ晩からじと、乃ち其嫂金を路費と爲し諸方を歷覽し給ひしが、未だ父を尋ぬるに由なく、遂に香船に附して南海の普陀山に至り、觀音大士を頂禮し給ひけり。國師の意には、菩薩の神力必ず能く父を尋ぬるの願を助け給はんと思ぼしたるなりけれ。既にして普陀山に登り給へば、佛境清勝にして凡念頓に氷釋しぬ。是に於いて乃ち人生の功名富貴は大空に浮べる雲の如くにして、唯成佛作祖のみ方さに大丈夫の事を了すと觀念し給ひ、遂ひに潮音洞主に投じ道人と爲りて茶頭の執事を領し、日に萬衆に供す

妙高峯

（十二景之一）

翠靄妙高竟日看
見時容易到時難
自憐老足無何用
收拾風光炤膽肝

隱元題



るも以て勞と爲し給ふの色なかりき。洞主乃ち見て嘆じて曰く、此の佛子眞に菩薩の使なり、其信心懈怠ならざること此の如しと。幾くもなくして福清に歸りて母を省し、之に勸めて佛に事へ齋を持せしめ給ひしが、既にして母は長逝し、茲に子道盡くるを以て、出家の念益〻決するに至りぬ。黃檗の鑑源禪師は賜紫沙門として當代の名僧なりしが、國師の夙根敏鋭なるを知り、遂に之を剃度せられぬ、時に年二十九にて在はしき。當時或る者、國師の剃落し給ひしを嘲りて曰く、東林にも亦佛ありやと。東林は福清の一邑にして國師の產れ給ひし地なり。是れ東林に產れたる隆琦其人も能く成佛作祖し得るかと冷罵したるの意に外ならじ。國師之に應へ給ふやう、嘗て聞く佛性は沙界に遍周すと、豈獨り東林を外にせんや、昔し廬山の東林に慧遠法師あり、焉んぞ今日の東林に遠公なきことを知らんやと。酬對おのづから禪機を具し給ふ、始めて剃落の時に於て早く已に此禪機あり、以て國師が夙に超凡の眼を具し給ひしを察し奉るべし。是れより後、國師

は凡そ天下の勝刹名山の知識耆宿にして一德の稱すべきものあるときは悉く歴參して請益し給はずと云ふことなかりき。時に臨濟下の尊宿密雲和尚、金粟山に在りと聞き、遂に金粟に往いて參見し給ふ。其の三十七歳の時人に與へ給ひし書中に、

山僧は自ら是れ東林一介の凡夫、二十九歳にして黄檗に出家す、貴族の老幼駭然たらずと云ふこと莫し、山僧頗る其意を知る、克志精修、徧ねく諸方に參じ、後金粟に在ること五年、法の源底に徹して乃ち、已分、中日用、事無別の旨を省す。

とあるにて、密雲和尚の會下に於て大悟徹底し給ひしことを知るべし。其翌年金粟解制の後、國師は密雲老和尚を辭し去り給ひしが、偈あり洵に雄渾奇拔の文辭たり。曰く、

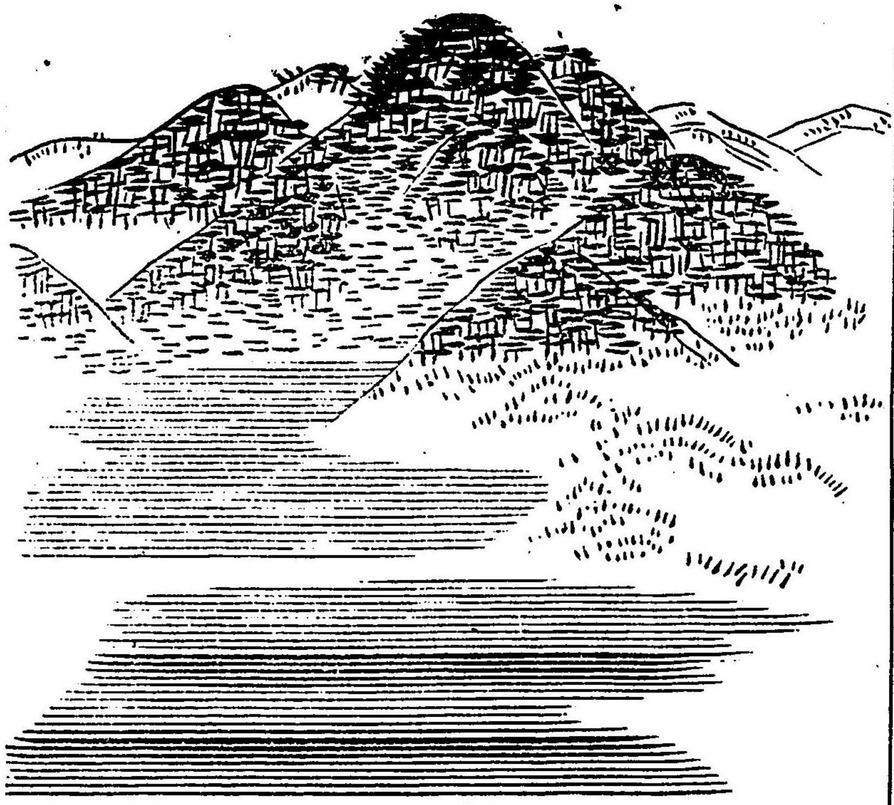
水裏有天藏世界。潭中無物映山河。錦鱗破波翻身去。敢借風雷意若何。

三十九歳の春、密雲老和尚に從ふて黄檗山の請に應じ給ひ、其翌年更に聘

大吉峯

（十二景之二）

天生三秀
出雲霓
峻拔來朝
正法場
萬福門開
鐘聞氣
永垂千古
爲禎祥
隱元題



せられて獅子岩に住し給ふ。四十九歲の冬、黃檗山費隱容和尙を請じて主席たらしめ、又國師を擧げて衆に首たらしめぬ。是に於て國師の道益〻高く德彌〻厚く、親しく費隱和尙の記別を受けて遂に臨濟の正傳を得給へり。四十六歲の夏、會〻黃檗、席を空うしたりしかば、耆宿等、國師に其席を董し給はんことを請ひ奉れども、之を却け給ふ。請ふこと益〻切なるによりて遂に之に應じ給ひき。

黃檗山は福州福建に在りて寺號を萬福寺と云ふ。黃檗希運禪師の創建せられし名刹なり。希運禪師は唐の宣宗皇帝に惡辣の鉗鎚を加へたる大善知識にして諡號を斷際と賜ふ。是れ帝の爲めに前後を際斷したるの意に取れるなりと云ふ。臨濟宗の鼻祖義玄禪師は卽ち此の斷際希運禪師の衣鉢を受けられたる人なり。

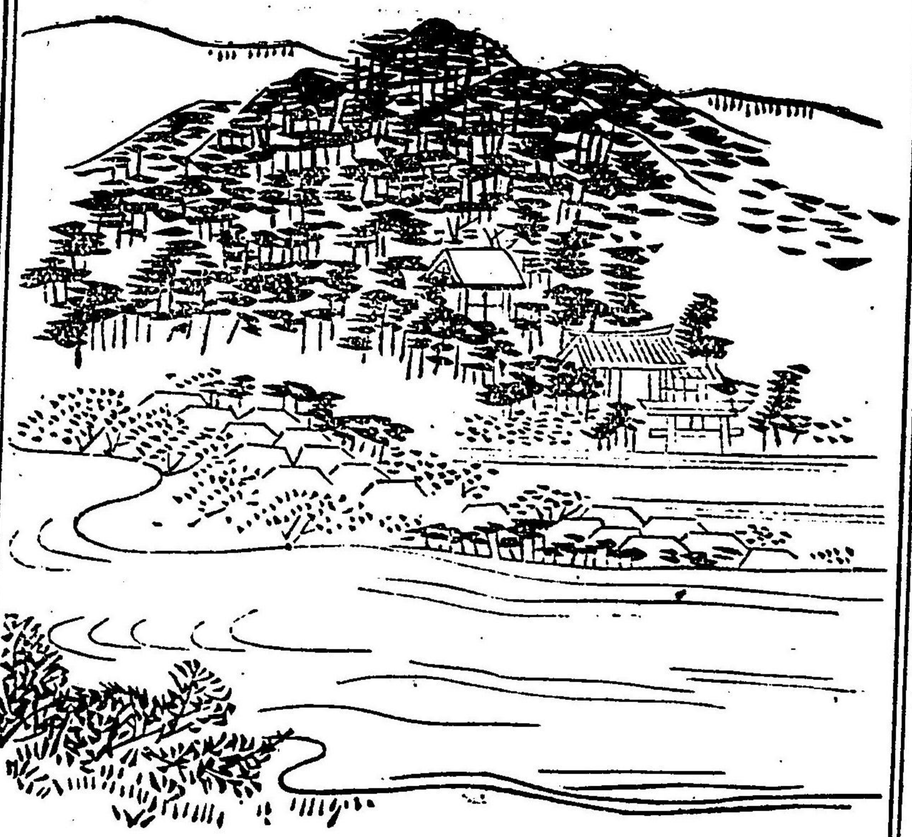
是より先き、獅子岩の側に塊石あり舟の如くなりしが、遊客每ねに其の平かならざるを以て嘆と爲しぬ。國師宣はく、時節若し至らば自然に平かな

らんと。一夕、石上に跏趺し、持呪默祝し給ふやう、此を去て黃檗の法道果して行はれば此石平かなるべしと、端坐し炷香して室に歸り給ひしが、次の朝侍僧報じて曰く、奇なる哉石已に平かなりと。國師宣はく、必ずしも說かざれ、吾が祝已に徵ありと。因て自平石と名づけ給ふ。顧ふに當時黃檗山は其殿堂漸く傾廢し、道場亦太だ盛んならざりしが如し。然るに國師の晉山し給ふに迨び、再び重興して儼然たる一大禪林となりき。時に密雲和尙は天童山に據り、費隱禪師は法通寺を董し、國師は黃檗山を主りて、三代一時に祖道を紹述し給ふ。法門の盛事之に過ぐることやあるべき。後ち國師は浙に往き、費隱禪師を省覲し給ひしが、留められて崇德の福嚴に住し、長樂の龍泉に移り、再び黃檗に回り給ふ。斯くして茲に至るまで前後十七年の間、至る所の地、緇素集ること雲の如く、凡そ名公鉅卿耆英碩德の參叩して道を訪ふ者殆んど虛日なし。國師別に奇異を立せず、機に隨ふて導化し給ひければ、賢愚高下に論なく、皆一言半語を得て自心を了しぬ。洵に禪宗の

五雲峯
（十二景之三）

兩輪出沒
　遠紅霞
五彩峰頭
　着錦紗
吉氣臨坦
　增瑞色
朝昏掩映
　法王家

隱元題



指南救時の藥石と申し奉るべし。

清の世祖順治三年、國師六十二歳の時、長崎興福寺の住持、逸然、朝命を奉じ、僧古石を差して書帛を齎し、國師を聘して東渡演法し給はんことを請ひ奉れり。是より先き、數たび請じ奉れども許し給はざりしが、茲に至りて之を容し給ふ。時に偶〻宋朝の陳希夷仙人の下降するに遇ふ。國師乃ち之に問ひ給はく、老僧近ごろ日本の聘請を受く、知らず彼方の佛法行はるべしや否やと。仙人曰く、可なり、但だ初めて到り給ふの時且らく棒を用ゐ給ふべからず、恐くは俗人未だ知らざる者あるべし、師此を去て正に新天子の出世に遇ひ給ひ、他日道必ず大に行はるべしとて偈を述べて曰く、

【嚼盡黃根齒不寒。可知機下有禪關。三千桃藥初生日。以待眞人共對殘。】と。

陳希夷、名は摶、字は圖南、又無煙と號す。亳州眞原の人、宋の太宗詔して號を希夷先生と賜ふ。宋より國師の當時に至るまで七百三十餘年なり。

明年夏六月、國師海に航して東し給ふ、舟中夜懷の偈あり、曰く、

萬頃滄浪堪濯足一輪明月照禪心可憐八百諸侯國未必完全得到今

時に波濤洶涌し、舵工も爲めに色を失する程なりしが、國師は從容として兎參の二字を書し給ふに浪濤遂に平かなり。巨鱗數萬、舟に隨ふて行く、蓋し其德を慕ひ奉れるなるべし。七月五日長崎に着し給ふ、實に正保四年なり。是に於て同地の興福寺に開法し給ひ、明年崇福寺に移り給ふ。此秋七月、攝州普門寺の賜紫龍溪和尚の請に應じて同寺に說法し給ふ。爾來六七年の間殺活縱橫機に隨て普化し給ひ、數百年の久しき落莫として振はざり禪宗も此に至りて雲霧を撥開し皎日の天に當るが如くなりぬ。萬治元年戊戌の冬江戸に上り給ひしが、將軍家綱公、國師を延見し寵遇異常なりしを恨みぬ。已にして普門寺に還り給ふの後幾くもなくして支那に歸り給はんとするの志あり、龍溪和尚をして江戸に之て辭を告げしめ且つ送る偈を以てし給ふ、其偈に曰く、

老僧隱元

不沾蕊草是司南
惟有遼天雙鼻孔
日炙風吹只自甘
懶拖犁耙化爲巖

（十二景之四）

白牛巖

年來自覺愈龍鐘。撥轉船頭始見功。珍重普門門內主。暗吹江上一帆風。

閣老、上意を承けて切に國師を留め、且つ京洛附近に地を賜ふて梵宇を營構し、以て祖風を斯に弘宣し給へと傳へらる。是に於て遂に歸帆の志を翻し、黃檗山を創建し給ふことゝはなりぬ。

是より先き、永井信齋居士なる者あり、師を請じて宇治に遊ばしむ。國師、舟中にて太和田の內境を仰望し給ふに、妙高峰の圓にして且つ秀づるあり、指して從者に宣ふやう、此峰の下必ず勝地あるべしと。此に至り幕府の賜を承けて京洛附近に地を擇び給ふに迨び、人をして之を相せしめ給ふに、果して一平掌の如くにして頗る國師の意に合ふ、よりて此處に梵宇を捌建し給ふ。寛文元年、總門、西方丈、執事寮、厨房等の諸堂先づ成る。仍て黃檗山萬福寺を以て之に名づけ給ふ。蓋し本を忘れざることを表し給へるなり。此より漸次伽藍全備し、今日の如く居然たる雄刹とぞなれる。

因みに云ふ、太和田は今の五ケ莊なり、而して當山の境地は元と中和皇

太后の采隱し給ひし處なりと傳說し、現に中和皇后の鑿ち給へりしと稱する一井猶存在せり。

斯くて禪林の儀制は燦然として一新せられぬ。國師年七十二、上元の日、大將軍の令旨を承けて國の爲めに開堂祝聖し給ひしが、是日帝駕も亦筵に臨む。諸山の碩德咸く集て嘆じて稀有と爲す。尋で幕府、僧粮四百石を賜ふ。會、太上法皇晏居の暇、念を禪宗に傾け給ひ、詔を下して法要を示さんことを請ひ給ふ。國師乃ち奏對し給ふ、其要に曰く、

單傳直指の道は別に言說なし、唯身心を放下して無位の眞人を覷破し、自悟自徹して而して後己まんことを要す。既に徹悟了然たるときは則ち生死去來自由自在、富貴に處して富貴の爲めに羅籠せられず、人天に處して人天の爲めに留礙せられず、能く萬象の主となり、而して四生の父と作る、

と。皇情大に悅び給ふ。嗚呼、國師東來して此の佛心天子に逢ひ奉り、以て法

門を紹隆し給ふ、隙仙の讖言是に至りて空しからずと謂ひつべし。

國師、本山に住し給ふこと屋かに四年、頗る槌拂に倦みて、乃ち松隱堂に退休し給ひしが、法皇は常に其道化を欽し給ひ、佛舍利、御香、黄金、其他御物を賜ふもの其數を知らず、延寶元年三月下旬國師微恙あり、四月二日疾革かなり。法皇詔を降して慰問し、特に大光普照國師の號を賜ふ。越えて明日未の刻、末後の句を書し、筆を投じて坐化し給ふ。世壽八十有二、法臘五十に三を加ふ、末後の句に曰く、

西來柳栗振雄風、幻出槃山不宰功、今日身心俱放下、頓超法界一眞空。

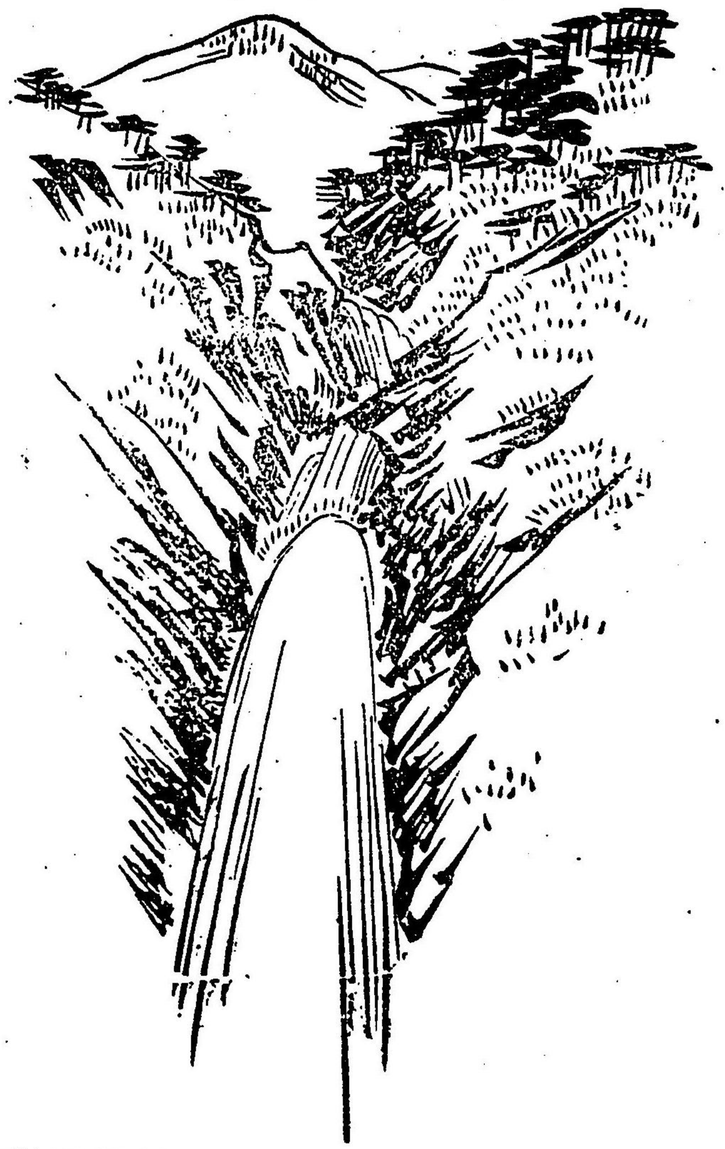
享保七年三月、靈元帝、諡を佛慈廣鑑國師と賜ひ、明和九年三月、明和帝、勅して徑山首出國師と鑑し、文政五年三月、仁孝帝、覺性圓明國師の號を追贈し給ふ。

國師東土に渡りて後著はし給ふ所、扶桑錄十六卷、雲濤二集八卷、太和集四卷、雲濤三集四卷、佛祖圖讃一卷あり、中華語錄二十卷と共に世に流行す。

青龍澗（十二景之五）

妙高一脈
注龍津
引入雲厨
供至人
徹底不忘
源本者
隨流得妙
自神通

隱元



國師の嗣法二十三人あり、皆頂門の一隻眼を具す、就中木菴和尚は本山第二代の席を董し(明治十四年諡を慧明國師と賜ふ)慧林和尚は第三代の法を主り、獨湛和尚は第四代の法嗣を揭ぐ、皆支那僧たり、爾來第二十一代に至るまでは、第十四代と第十七代とを除くの外は皆支那の舊黄檗より渡來して主席を董し法燈を挑げられしが、第二十二代以後に在りては竟に支那僧の來嶠其蹤を絶つに至りたり。されど一切の法式、すべての儀制は今日と雖も猶ほ開山の當時と毫も異なる所なし。國師當山を開創せらるゝに際し無隱元晦禪師の墳墓を發見せらる、禪師は豐前の人にして敕諡法雲普濟禪師元に遊び天日中峯國師に參じ及び諸老に謁す歸朝の後ち筑の顯孝聖福相の圓覺建長洛の建仁南禪に歷遷し而して壹州安國寺の第一世と爲す延文二年十月十七日を以て示寂す國師と禪師と時世異なるに暗に其名を同ふせらるゝが如き又奇と云ふべし塔頭に松隱堂の外三十二院あり開山國師法子法孫のもの之れを創建す其院に曰く、

萬壽院　萬松院　天眞院　龍華院　獅子林院
眞光院　鳳陽院　壽・光院　法苑院　慈福院
綠樹院　別峯院　大潛菴　寶善菴　東林院
瑞光院　法林院　龍興院　漢松院　華藏院
長松院　聖林院　崇壽院　法惠院　壽泉院
寶藏院　吸江菴　紫雲院　白雲菴　華嚴院
自得院　慈照院

○伽藍及び佛像幷に聯額

伽藍の配置其法を得て堂宇の能く完備したる、結構莊嚴全く支那式を用ゐて其の輪奐宏壯なる、安置の佛像悉く一印官の手に成りて其製作の優秀なる、各堂の聯額が至る所に春蘭秋菊の美を競ひて殊に偉觀を呈せる、是れ當山に於けるの異彩なりけり。

境内廣さ二十一萬餘坪ありしも明治維新の革變と陸軍省用地との爲め

現境内坪數四萬三千百二十一坪に減せり其の重もなる建物二十餘棟、此建坪殆んど二千坪に達す。今其の重もなるものを擧ぐれば、

總門、三門、天王殿、大雄寶殿、法堂、東方丈、西方丈、威德殿、祠堂、祖師堂、禪堂、齋堂、鐘樓、鼓樓、伽藍堂、聯燈堂、通玄門、開山堂、松隱堂、舍利殿、眞空塔、浴室、等にして、此中大雄寶殿を始め一二の堂宇は雲南木を以て其柱に用ゐたり。又以上の諸堂が全く完成したるは第二代木菴和尚の時に在りとす。いでや是より總門を始めとして順次に一々掲げ記るしてん。

○總門　單層屋根、開き一間三尺、寛文元年創立。

「第一義」の横額、「宗綱濟道重恢廓」「聖主賢臣悉仰尊」の題聯は何れも本山第五代高泉和尚の筆なり。

○三門　重層にして裳階あり、梁行五間、桁行九間、延寶六年創立。

高く表面の上層に掲げられたる「黄檗山」の竪額下層に懸けられたる「萬福寺」の横額「地闢千秋日月山川同慶喜」「門開萬福人天龍象任登臨」の聯は俱に開山國師の筆にして、「祖席繁興天廣大」「門庭顯煥日精華」の聯は第二代木菴和尚の揮毫に係る。又後面に掲ぐる所の「旃檀林」の横額、及び「大道沒遮攔進步直登兜率殿」「法門無內外翻身拶入旃檀林」の聯は第六代千呆和尚の書せらるゝ所なり。

三門の兩傍に窟門あり、右を「通宵路」とし而して「眼底有疑休縱步」「胸中無礙自通宵」と題し左に「白雲關」とし而して「門外已無差別路」「雲邊又有一重關」と題す、俱に是れ高泉和尚の筆に係る。

○天王殿　單層屋根、梁行六間半、桁行十一間、寛文八年創立。

本尊は彌勒佛にして外に四天王及び韋駄天の像を安置す。支那印官范道生の作る所なり。他の諸堂に安置する所の佛像皆然り。國師の年譜を案ずるに「師國に入りてより見る所の梵像甚だ如法ならず、適〻閩南に范道生と云ふ者あり、造ることを善くす、眉監院に命じて觀音韋駄天、伽藍、祖師、監齋等の像を督し造らしむ」と見えたり以て本山の佛

雙鶴亭

（十二景之六）

雙鶴歸來
　　點水亭
聰開四面
　　寂惺惺
松頭放月
　　招禪侶
拶入雲濤
　　愈可聽

隱元題

像が特に其製作の他に殊なるを知るべし。

堂の表面なる「天王殿」の横額、「福地鍾靈特感四王護國」「慈門現瑞大歡三會度人」の聯は木菴和尚之を書し、又其後面なる「威德莊嚴」の横額、「首冠兜鍪感應三洲切不宰」「臂横寶杵護持正法德難磨」の聯は國師の神足にして木菴和尚の法弟たる卽非和尚之を書せらる。

○大雄寶殿　重層屋根、梁行十一間、桁行十二間。寛文八年創立。

本尊は釋迦牟尼佛にして脇士を迦葉尊者、阿難尊者とす。兩單に十八羅漢の像を安置す。正面に高く掲げ奉れるは明治十五年に下賜せられたる

今上陛下の御宸翰にして「眞空」の二大字なり。

又前面の上層なる「大雄寶殿」の大額は開山國師の筆にして、下層なる「萬德尊」は木菴和尚の染筆に係り、「佛是了事漢」「世豈無全人」の聯は卽非和尚の書する所、又「碧水丹山設長生之畫」「紅輪白月獻無盡之燈」は

高泉和尚の揮毫なり。更に殿内に入れば開山國師、幷に木菴、悅山二和尚の聯あり、國師の聯に曰く『宗門壁啓廓天心祇樹林中十聖三賢皆景仰』『紺殿莊殿光佛日寶華座上千枝萬葉永流芳』。木菴和尚の聯に曰く『一莖草現紫金容赴感流慈道被三千世界』『萬德功圓淨妙智隨機化物恩加百億人天』。悅山和尚の聯に曰く『千華臺上現出本身盧舍那』『萬德殿中移來一會耆闍崛』と。悅山和尚は本山第七代なり。

○法堂　重層屋根、梁行十一間、桁行十二間。寛文二年、閑老酒井雅樂頭空印居士忠勝の捐金により之を鼎建す。蓋し忠勝は國師に參じて契證したる人なり。

前面に掲げたる『獅子吼』の横額は開山國師の本師徑山費隱和尚の筆にして、『捧喝交馳國師千古猶在』『象龍圍繞靈山一會儼然』の聯は千呆和尚の書に係る。堂内には開山國師の『法堂』の横額と『大用現前時雲龍際會生頭角』『全機展拓處凡聖都來立下風』の聯あり。又本山第三代慧

林和尚の『等閑坐斷十方任是蘇彌燈王也須退步』『信手拈來條棒苟非沒量漢子誰敢承當』の聯あり。

○東方丈、　單層屋根梁行八間、桁行十一間。寛文三年創立。

丈室に開山國師の『方丈』の横額、木菴和尚の『頤指』の横額、及び『岸谷胸中新氣宇』『谿山几上別乾坤』の聯、千呆和尚の『痛棒頭明殺活』『熱喝下辨龍蛇』の聯あり。

○西方丈　單層屋根、梁行六間半、桁行十間。寛文元年創立。

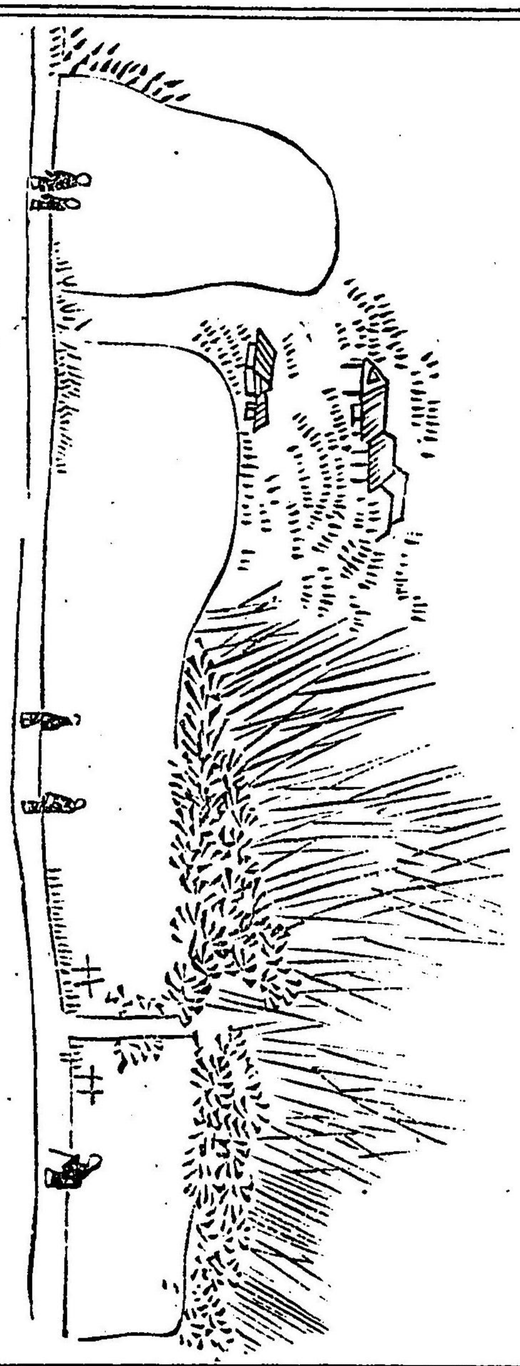
○威德殿　單層屋根、梁行三間、桁行四間。貞享四年創立。德川家の靈牌を祀る

『威德殿』の横額、『仁明昭日月』『威德鎮山河』『山河正氣』の横額『道契周召』『天下千秋歌聖化』『德齊燕趙法門萬古仰恩光』の聯俱に千呆和尚の書也

○祠堂　單層屋根、梁行四間、桁行六間。延寶二年創立。

本尊は地藏菩薩にして三界有縁の諸靈を祀る處とす。

『大願王』の横額、及び『廣度群生慈力圓』『欲空重獄願心堅』の聯、何れも本



三二 汲池（一名景之池）

潭深一丈湧泉三池水注渉廣待金

潭注物利　功德無能變　生勝化莫時

隱元題

山第十五代大鵬和尚の筆に係る。

○祖師堂　單層屋根、梁行四間、桁行四間。寛文九年創立。

本尊は達磨大師にして左右に歴代を祀る

「祖師堂」の横額、「少室流芳奕葉千枝競秀」「慧燈續燄祖庭萬古騰輝」の聯

皆木菴和尚の筆蹟なり。

○禪堂　單層屋根、梁行九間、桁行十間。寛文三年創立。

本尊は觀世音菩薩にして參禪辨道の修行を爲す所なり、堂の表面に

は開山國師の「選佛場」の横額、木菴和尚の「選佛門開直接風顛漢子」「辨

魔眼正頓超無位眞人」の聯あり、又堂内には開山國師の筆に成れる雙

對の聯あり、其一は「寶座鎮千秋妙矣門々彰大用」「慈容嚴萬福奇哉刹

々盡圓通」にして、其二は「懵懂主人翁喚醒眼睛明日月」「醜頂皮袋子打

翻鼻孔吼風雷」なり。

○齋堂　單層屋根、梁行九間、桁行十間。寛文八年創立。

中に緊那羅王を安祀す。衆僧の食堂なり。

堂の表面に木菴和尚の「禪悅堂」の横額、「禪行無厭堪應人天供」「清規有揮護參龍象筵」の聯あり。堂内の「法眼圓明日費斗金非分外」「偷心不死時嘗滴水也難消」の聯は開山國師の染筆に成る。

○鐘樓　重層、梁行四間、桁行四間。寛文八年創立。

○鼓樓　重層、梁行四間、桁行四間。延寶七年創立。

○伽藍堂　單層屋根、梁行四間、桁行四間。寛文九年創立。

本尊は華光菩薩なり。

「伽藍堂」横額「屏翰伽藍、令德聲揚四海」「權衡法護、大功瑞煥無彊」の聯皆木菴和尚の筆蹟なり。

○聯燈堂　單層屋根、梁行四間、桁行六間。貞享四年創立。

本尊は觀世音菩薩として過去七佛より西天の二十八祖東土の六祖以下本宗開山國師以來嗣法承傳のものを祭祠せり。

「聯燈堂」の横額、「一華開五葉、五葉悉聯芳」「一炬分千燈、千燈皆續焰」の聯、俱に木菴和尚の揮毫なり。

○通玄門　單層屋根、開き一間。延寶三年創立。

開山堂に詣する入口なり。開山國師の「通玄」の横額を掲げ、「門開蘭柱香彌遠」「塔蔭人天福莫量」の聯は木菴和尚の筆なり。

○開山堂　重層屋根、梁行六間、桁行十間。延寶三年創立。

本尊は開山國師の像を安置す。

高く前面の上層に掲げられたる「瞎驢眼」の横額は費隱和尚の筆にして、下層に懸れる「開山堂」の横額は木菴和尚の手蹟とす。又「赤手鬪叢林名傳帝闕」「通身現眼目光照桑天」は高泉和尚の聯にして、「佩祖印渡鯨波盡道達磨現在」「振宗門開棨嶠分明斷際重來」は慧林和尚の聯なり。「德重紫宸特賜師名尊一國」「山開黃棨高懸宗鏡照千秋」は悅山和尚の手蹟にして「道著南天第一」「敎傳東國無雙」は三山鄧會の贈る所なり。

又堂内には五雙の聯搭在す、其一は木菴和尚の筆にして「法亞千宗剔餘祖燈爲國瑞」「山開萬仞流通聖脈指關津」。其二は本山第四代獨湛和尚の筆にして「開廓山堂海國鳳麟從此出」「不承祖烈藥林龜鑒攸司存」。其三は國師の法子にして獨湛和尚の法弟たる南源和尚の筆にして「闢地開天應享千秋香火祀」「祐民福國宜爲一代帝王師」。其四は南源和尚の法弟獨吼和尚の筆にして「德重丘山布髮掩泥知莫報」「恩深河海粉身碎骨也難酬」。其五は千呆和尚の筆にして「宗開雙國法幢高豎人天仰」「道被九重化風大振象龍奔」是れなり。

○松隱堂　單層屋根、梁行七間、桁行十間、元祿七年再建。

此堂は開山國師の退休し給ひし所なり。國師の當時は唯一小庵なりしなるべきを、元祿七年に至り法子法孫等更らに其規模を大にして之を再建せられけるなり。

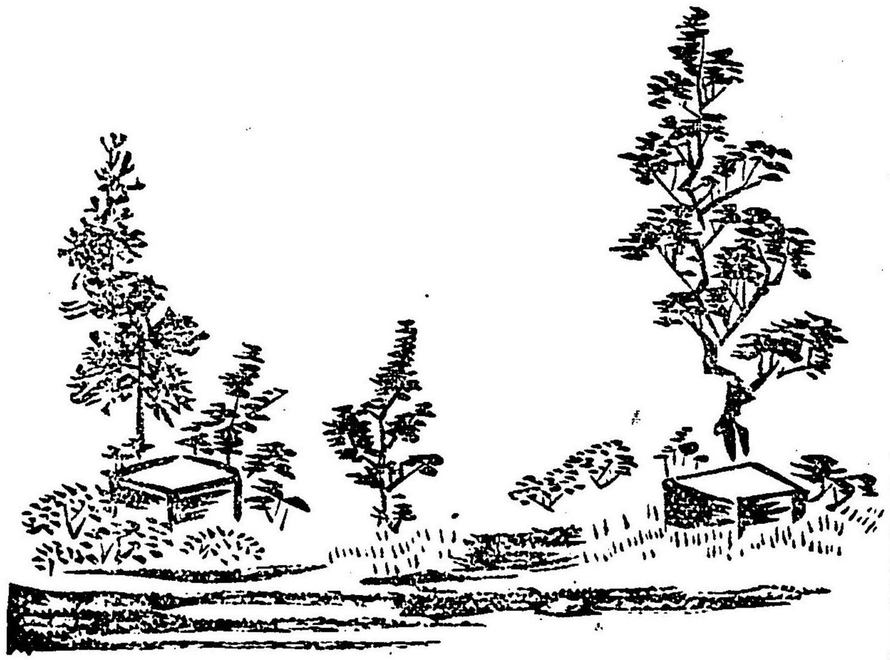
國師晩年甚く此堂の風月を樂み給ひ、其詩偈の大半は松隱吟ならぬ

龍目井

（十二景之八）

龍池正脈鐘黃檗
豁出門頭兩眼開
收拾森羅群秀氣
圓明徹底本源來

隱元題



はなし。今其一二を記せば。

松隱堂

采隱奇逢十八公。無疆福壽在其中。歲寒郤有凌霜志。天喜冷然大雅風。
簇々孫枝增翠茂。亭々老幹長豐隆。環園日映龍蛇會。戲彩堂前一咲翁。

又

天外遨遊不定蹤。邇來思隱入深松。懶攀朱紫紅塵少。却喜煙霞綠影濃。
兀坐安閒無物累。興時磊落有雲從。杖頭眼瞎招風月。一片淨光徹九重。

○舍利殿　單層屋根、梁行三間、桁行三間。松隱堂の上にあり。

謹で案ずるに、後水尾太上法皇、開山國師に御歸依あらせられ、寛文六年六月二十九日、佛舍利五顆を寶塔に藏めて之を國師に賜ひ、且つ添ふるに宸讃を以てし給ふ。其宸讃に曰く、

北天曾自奉南山。古佛眞身傳世間。十萬里程靈骨暖。三千年後異光斑。
宋皇述讃感生相。源將傾心欽定顏。晨夕拳々服膺久。樂峯永仰五雲間。

佛舍利賜隱元禪師

と。又金を賜ひ勅して舍利殿を建てしめ賜ふ、本殿即ち是れなり。正面に賜ふ所の寶塔を安置し法皇の尊像を奉祀せり。

「舍利殿」の横額、「五彩珠光臨萬福」「九重寶蓋蔭千秋」の聯は開山國師の筆なり。

○眞空塔　單層屋根、一間六角。寛文四年建立。

開山國師の塔所なり。國師の御倚像を安置す。「眞空塔」の竪額は靈元天皇の御宸翰にして享保七年三月十三日賜ふ所に係る。「天開壽藏長生日」「地湧松岡不老春」の題聯は木菴和尚の筆なり。

○浴室　單層屋根梁行六間、桁行十間。元祿六年鼎建。

正面に跋多波羅尊者を安置す。

「浴室」の横額、「身心清淨未許便休」「水垢頓除更須一洗」の聯共に高泉和尚の筆なり。

○省行堂　單層屋根、梁行六間、桁行八間、元祿六年鼎建。

正面に觀音大士を安置し疾病の衆僧を療養せしむる處なり「省行堂」の横額「不レ關二是非一身增泰也心增坦」「能省言行福愈廣兮壽愈長」の聯共に悅山和尚の筆なり。

○雙鶴亭　單層屋根、梁行三間、桁行三間。

境内十二景の一なり。

「雙鶴亭」の横額「點塵飛不到」「雙鶴占機先」の聯は皆開山國師の筆蹟なり。

○妙高亭　重層屋根、梁行三間、桁行三間。

東方丈の庭園に在り。

「妙高亭」の横額「境妙含二華藏一」「亭高納二大千一」「山雲」の横額「曲逕通二幽處一」「山亭花木香」の聯何れも木菴和尚の筆なり。

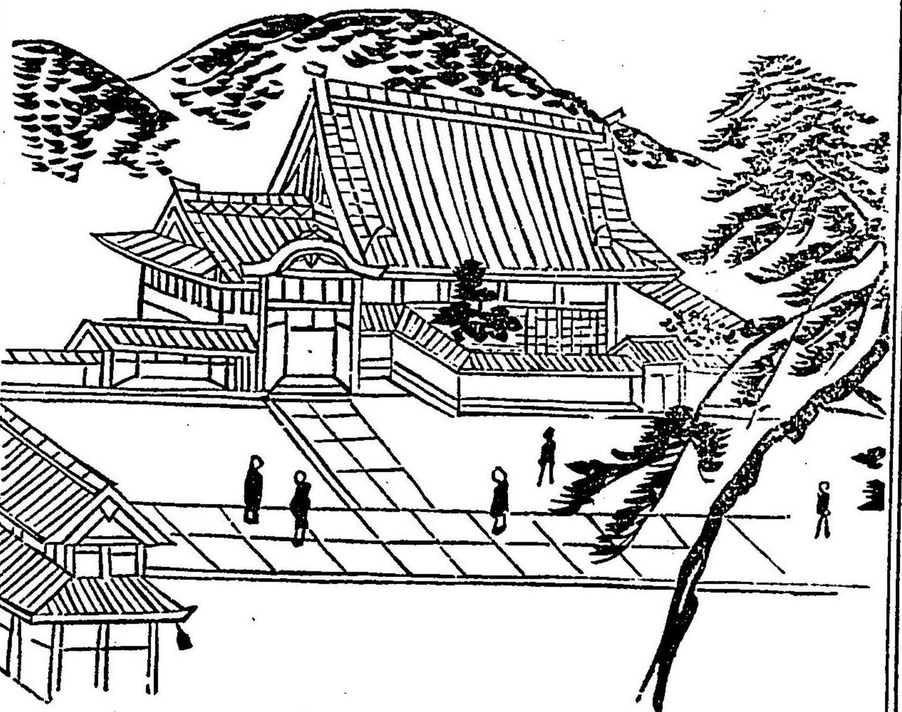
○塔銘　花崗石。　寶永六年建立。

松隱堂

（十二景之九）

宮室飛來松隱中
却容莽鹵掣顛風
松仙影裡呵呵咲
難得西來一老翁

隱元題



開山國師の塔銘にして支那中極殿大學士燕山杜立德の撰する所なり。文辭雄麗にして善く國師の偉德を讃揚したるものなれば左に之を掲げつべし。

大日本山城州黃檗山萬福禪寺開山特賜大光普照國師
隱元琦老和尚塔銘
賜進士出身光祿大夫禮部尚書上柱國太子太師中極殿大
學士燕山杜立德拜撰

夫乾坤未啓。佛性難明。混沌既開。常光顯露。但聖凡懸隔。迷悟頓殊。苟非無位眞人一片婆心。具大辯才。伸廣長舌。則苦海茫々。誰登彼岸。不幾萬古如長夜哉。自迦文出世。七十九年。談經三百餘會。自覺覺他無非欲人明心見性。悟出本來面目。方脫生死輪回之苦。由是西乾四七。東土二三。一燈相傳。萬象皆朗。迨有嶽青原。而下分爲五宗。唯臨濟一宗獨得其傳。具正法眼。歷代以來。廢興不一。始於唐盛。於宋至明。則少衰焉。及三十四

傳。密雲悟禪師闡揚宗風。濟北重振。再傳而爲費隱容禪師。二師道覆虛空。名聳海嶽。如獅子一吼。百獸震驚。語錄流傳。入藏久矣。而隱元老和尚早升密雲之堂。暮入費隱之室。乃容之嫡子。爲悟之統孫。超凡入聖。一面擔當。翻千百年未了之公案。發億萬人本地之風光。智殊在手。縱橫無礙。兩開黃檗。應化西東。現身說法四十載。間上自皇朝宰相。遠暨東國王臣。下及士庶工商僧俗男女。罔不景仰瞻依。傾心向化。自唐宋以來未有若斯。其盛矣。當達磨東渡。斷際重來也。今師示寂十四年矣。蓋因海氛梗塞。兩國未通。茲聖天子崇儒重釋。四海爲家。異域殊方。同仁一體。康熙丙寅春。其嗣法門人南源。附商舶。便資廣錄年譜。請京師求余爲塔上之銘。余觀師道法。高深德澤。弘大。巍々莫擬。蕩々難名。姑述其大略。聊見其一班。按師諱隆琦。號隱元。閩之福清人。姓林氏。爲八閩望族。世守詩書。響纓濟美。父名德龍。母龔氏。有賢行。好施。生子三人。師其季也。甫六歲。父客於楚。未還。攻讀。九歲入學。迥異凡兒。困父久客未歸。家道式微。遂業耕樵。

以供母承歡以孝聞常靜夜坐臥松陰仰觀天文星月有感因萌學佛之心比壯母欲爲嫂堅執不從惟以尋父爲念於是繭足直抵豫章至金陵歷覓三載杳無蹤跡附香船至南海普陀山頂禮大士陰求尋父之願至其地見佛境殊勝凡心冰釋以爲人生功名富貴如太空浮雲唯成佛作祖方了大丈夫事即投潮音洞爲茶頭日供萬衆略無難色後歸省母勸母奉佛茹蔬及母終子道已盡出家之念益決閩中黃檗賜紫鑑源禪師知師慧性夙具遂度剃落時年二十九歲也自是矢志精修光揚佛道凡天下勝剎名山知識耆宿有一德可師者莫不歷參請益究玄微時密雲悟和尚費隱容和尚父子同時名震海內適密開法金粟龍象畢集不下萬餘指遂往參依日契玄機歎爲異目閱六載辭歸住靜獅子巖及費主席黃檗擢居版首於是道益高德益厚親承記莂遂得臨濟正傳會黃檗虛席衆延師補之以多年荒圮之道場一旦重興儼然東南一大禪林皆師之力也後之浙省覲費和尚於金粟留主崇德福嚴移長樂龍泉再回

隱元題

走龍蛇

滿山特地

風弄影

夜靜月來

拱翠霞

環繞千峯

鶴爲家

萬松頂上

（十二景之十）

萬松岡

黄檗前後十七年所至之地緇素雲集凡名公鉅卿耆英碩德參叩問道無虛日師不立奇異隨機導化無論賢愚高下得一言半語皆能了悟自心誠禪宗之指南救時之藥石也迨大清順治癸巳冬扶桑國長崎興福住持逸然會公特奉王命差僧古石聘師東渡師念乾坤一體大道無私疆域雖殊佛性不異遂於甲午夏六月航海而東時波濤洶涌舵工失色師從容書兎參二字浪遂平海族數十萬附舟而行七月五日登岸則瑞光燭天咸言乃師入國啓化之徵於是首開法與福越明年移崇福秋應攝州普門賜紫龍溪大德等前說法當寺蓋日國禪宗自宋蘭溪隆倡起之後數百年間寥々不振及聞師至如撥開雲霧皎日當天舉國感激加歎以爲古佛重臨菩薩再世也六七年間隨機普化咸渴歸誠萬治戊戌冬之江都大將軍延見寵遇異常而酒井空印閣老暨列州牧伯參謁皆恨相見之晚既而大將軍傳命留師行化賜地洛南大和建立梵刹費金錢鉅萬丹碧輝煌何異珠宮寶殿復捨莊田爲齋糧以垂永久師仍以黄

檗山萬福禪寺爲名不忘本也辛丑秋進寺禪林儀制燦然一新會太上法皇妥居之暇留念南宗嘗詔問法師即奏聞皇情大悅朝士京尹時預法會居四載頗倦椎拂乃退休松隱堂法皇尋以佛舍利并御香黄金等親晒宸翰爲製讚賜隱元禪師迨延寶癸丑三月下旬示微疾四月二日法皇降詔慰問特賜以大光普照國師之號師遜爲頂謝越明日未刻乃書偈坐化世壽八十有二法臘五十加三生於明萬曆二十年壬辰十一月初四日戊時也東住凡二十年塔全身於本山萬松岡之下坐癸向丁嗣法龍華海寧等二十三人廣錄三十卷年譜二卷隨大藏流行嗚呼佛教自入中華二千餘年矣歷代祖師祖承中間善知識大宗師不過度化一時或倡和一方未有如師出群拔萃傳臨濟三十二世之正脈爲扶桑百千萬年之宗祖十方瞻仰三代楷模故道非佛不明法非王不尊從來天子國王宰官皆爲靈山一會儻非師道德高深安能以心傳心如水投水無感而不應哉亙古一人於今莫比猗歟盛哉銘曰

天生眞人　無位而尊　爲黃檗祖　乃臨濟孫　壯遊湖海
洞徹法源　須彌芥納　巨浸毛吞　既而瑞世　主長法門
化綱總握　玄要掀飜　鞭撻龍象　變化鯨鯢　迅機電掃
熱喝雷奔　大哉師也　名震帝闕　東來開化　澤被三根
既週能事　疾入泥洹　去來無住　生死曷論　松岡一座
蒼翠惟繁　浮圖永鎭　正體長存　瞻之仰之　孰不懷恩
恩光萬古　普照乾坤

○十二景

當山に十二景あり、こは開山國師が支那黃檗の十二景に倣ふて撰み給へりしものなり。左の如し。

妙高峰

寺の背後に在り、其頂圓にして秀で、衆峰に拔出す、因て此名を得たり。

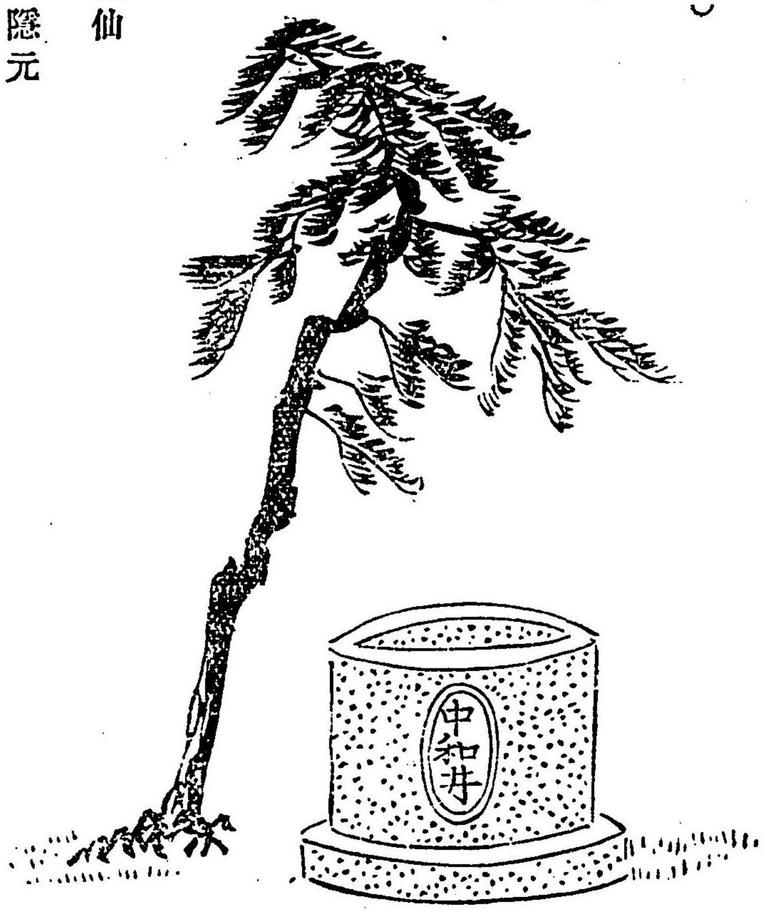
大吉峰

中和井

（十二景之十一）

天開玉井古
皇前特地
輸贔般
若泉一
脈鏡清
功德水二
時捧獻老金仙

隱元



寺の東南に見ゆるものにして、萬峰相聯なり、其勢鳳凰の翼を展べたるが如し。

五雲峰

妙高峰の左に在り、常に法雲を布く、因て名とす。

白牛巖

其形牛の蹲れるに似て其色白し、寺の左方柳宮の上に在り。

青龍澗

寺の左方、白牛巖の下に在り、源を妙高峯より發し、寺を遶りて西に轉じ、宇治川に入る。

雙鶴亭

元と西方丈の右に在りしが、今は其舊趾のみを存す、國師始め寺地を擇び給ふ時、雙鶴の松頂に飛鳴するを見て嘆じて宣はく、奇なる哉此鶴は乃ち吾が前導なりと、因て此亭を建てゝ名とし給ふ。寛文元年の秋、國師の法嗣道實和尚此亭に在りて、指を刺し華嚴經八十一卷を血書ぜられたりと云ふ。

三汲池

門前の左方、宇治に到るの道側に在り、國師利物の意を以て之を擴充して深廣ならしめ、以て旱魃を防ぎ以て放生するに足らしめ給ふ。

龍目井

門前の左右に在り、寛文元年の冬、國師の鑿掘し給ふ所なり。國師自ら之を記し給はく、山有宗、水有源、龍有眼、耀古騰今興雲致雨以及民時、源頭澄徹晝夜廉間、以足民用、故名と。

松隱堂

國師御退隱の處なり。寛文三年、江府に性温夫人なる者あり遺嘱して所居の第宅を喜捨し、海より運び至る、國師其の捨て難きを能く捨てたるを念ひ、爲めに之を建て、扁して松隱堂と名づけ給へるなり。今の堂は前

に記るせし如く元祿七年に法子法孫等が再建せられたるものなり。

萬松岡

松隱堂の上に在り、甚だ高からざれども、其形猊兒の池に踞るが如し、而して其松籟恰も猊兒の月に吼ゆるに似たり。蒼翠秀色眞に掬すべし。

中和井

松隱堂の境内、開山堂の左前に在り、傳へ云ふ中和皇后元と此處に在はして鑿ち給ふ所なりと、因て此を名とす。

東林庵

國師の法子大眉和尚の建つる所にして寺の左方半里許の處に在りしが、明治八年、陸軍省火藥庫敷地に收用せられたるにより、寺の附近に移轉せり。されど今は昔しながらの俤を留めず。

○一切藏經木版幷ニ鐵眼和尚の事

當山に於ける第一の什寶は一切藏經木版なり。こは塔頭寶藏院の所藏にして、其寶庫は元と本寺の左方に在りしが、明治八年、其敷地を陸軍省に收用せられしより以來、本寺の法堂に之を鎭藏せり。其木版の數六萬枚に達し、七千餘卷の一切藏經は此に摺立てられて世に流行す。もし當山に此木版莫からんには、日本の佛敎は決して今日の如く能く敎義の弘通を見ることを得ざりしなるべし。されば此木版は實に當山の什寶たるのみならず、實に佛敎全體の爲めに唯一の珍寶なりと謂ふも過言にあらざるなり。抑此木版は木庵和尚の法子鐵眼禪師の刻成せられしものなるが、今其來由を訪ぬるに、禪師は吾國が古より佛國と稱せられ伽藍像設の如きも完備し、且つ名師碩德も其人に乏しからざるに、獨り大藏經の版のみ未だ世に刊行する者なく、國中の缺典となれるを痛く慨き、菩薩の萬行中には法寶を流通するを以て最と爲すことを思ひ、卽ち刻藏の事を成就し永く般若の勝緣を結ぶべしとの大誓願を起し、之を開山國師に告げられたるに、國師も大に喜び給ひ、其所藏せられたる支那の藏本を賜ひ、且つ若干の地

東林庵
（十二景之十二）

把茅蓋頂息知音
一念無生互古今
徹悟昔年囲地處
渾身瀟洒在東林

隱元題

を與へて藏版を貯ふるの處となさしめ給ひき。師は其喜悅に堪へずして、寶藏院を此地に建て、又印房を京都に開き、專ら此事に從はれしかば、梓人は蟻集し施者は麕至したりしが、時恰も延寶の大飢饉は起りぬ、餓莩は途に倒れ飢者は巷に叫ぶ其慘苦の狀見るに忍びずして、師は乃ち其の千艱萬難を嘗めて集めたる法財を悉く散じて之を救助せられたり。是の如きこと前後二回、爲めに殍死を免るゝもの幾萬人なるを知らず若し常人ならましかば之が爲め刻藏の大業は挫折すべかりしに、師は更らに屈する色なく益〻奮ふて此に從事し、竟に延寶六年の秋之を竣功せられぬ。是に於て表文を製し經と共に後水尾太上法皇に上進せられしが、龍顏大に悅び給ひ、群臣に宣ふらく、大藏の卷帙此の如く繁多なるに而かも能く梓に登す、其志堅にして且つ確なりと謂ひつべし、法門の功臣、實に天下後世を福する者なりと。師の面目之に過ぐるものあるべき。是の如く師は能く堅忍不拔にして此大業を圓成せられたるのみならず、學三藏に通じ、兼て智辯

縱横、一代の風化巍々堂々として仰ぐべく貴ぶべきもの多し天和二年三月寂を示す報身の壽を享くること五十又三法臘四十春秋なりきといふ。

黄檗廼栞 終

明治三十一年五月十日印刷
明治三十一年五月十五日發行
明治四十五年三月廿五日再版增補發行

京都府下宇治郡宇治村大字五ヶ莊
五十番戸平民
編輯兼發行者　林梅雪

京都市上京區二條通木屋町西入樋
口町十二番戸
印刷者　河村泰太郎

貝葉書院印刷部印行

松隱堂藏版

339
53

339
53

339
53

019369-000-5

339-53

黄檗廼栞

林 梅雪／編

M45. 3

ABG-0061